

# ケアと女性

信 木 晴 雄

## 目 次

はじめに

1. ヒューマニズム
2. 太母
3. 女性という神話
4. 生命の尊厳
5. ケアについて

むすび

はじめに

ケアという言葉には倫理的なひびきがある。それは「魂を配慮する」という意味によって理解されるからである。それと同時に他者との結びつきによって成立つ自己実現の経験という意味をも併せ持つことがある。ケアは元は不安に苦しんだり、重荷を担うという負の側面ばかりではなく、ひとの治療に結びつくような「配意」を表す言葉であった。

また、ケアは「人格」を相互に認め合うという「思いやり」であるが、これはこれまで「人間性」という普遍的に捉えられてきたニュートラルな考え方によっては、十分に把握できないほどの「豊かな含蓄を備えた経験」として改めて「女性の視点」から説明されるべきものではないだろうか。

「人間らしさ」とは何であろうか。それはひとりひとりの人間が個性を持って自己を実現することができる、まさに「生きる」という意味の充実において明示されるものである。

だが、「人格」や「人間性」という一見すると何の問題をも含まない、「自明の事柄」においても予め、「性の差異」が前提されているとしたら、それはイデオロギーによって覆われたバイアスからは逃れることはできないだろう。そこで、「性の支配」という権力の戦略を読み解きながら、「ケアと女性をめぐる人間性の問い」を本論では考察してみたい。

## 1. ヒューマニズム

ヒューマニズムは人間中心の思考法である。この呼び名は「フマニタース（人間性）」を用いたローマ時代の雄弁家キケロ（-106/-43）にまで遡る。キケロは神によって地上で特別の恩恵を受けている人間がみずからの理性によって自然を支配することを宣言しており、それによって、ひとが上品さや

名声を熱望することや「教養」が承認されることになった。彼はソクラテス (-470/-399) とヘラクレイトス (c.540) から由来するストア派に属している。ストアは自然を大宇宙として、人間もちいさな宇宙と見なし、両者に共通の「ロゴス (生命を生み出す神的理性)」について説いている。さらに14世紀、ルネッサンス期にいたるまで自然は「生きている統一」とされ、自然の創造にさいし、「生命の原理」は神に由来する理性として認められてきた。それゆえ、人間の幸福は「自然の掟」としての理性に従い、それも神を離れてはもたらされないものとなった。つまり、この人間に内在する理性こそが、「神の似像」として理解され、「人間の高貴さ」をあかすものとなったのである。

ところが、18世紀、啓蒙主義の時代になると、その理性が神と人間とを分け隔てるきっかけとなる。万人に共通な理性が民衆にたいして無知や迷信をすてるように呼びかけるとき、来世という報奨からの解放によってもたらされる自然を機械とする「啓蒙人」は非宗教的な世界観において自然をあるがままに支配しようとしたのである。

しかし、「普遍的な人間が実は男性であり続けた」ことも忘れてはならないだろう。そして現代において合理主義をつらぬく科学の見方では感情は徹底的に数量化されてしまい、すべての出来事が客観化されてしまう。キケロが説いたヒューマニズムの立場とは個人としての人間の自由であったが、数量化されることのない実存や「生きる意味」もまた見逃されてはならないだろう。

## 2. 太母

ユング (1875/1961) は経験がなんらかの人物として、すなわちあたかも「人格」の性格を帯びるといふ事実について報告している。それは個人における夢や幻想ばかりではなく、それ以上に集団においてより根源的なイメージとして役割を果たす経験の層を貫くものとして理解される。

特に、ユングは女性にたいする「恐怖」について指摘しているが、これはまた身体と魂とによって支えられる圧倒的なエネルギーのありかから由来する本能とでも呼ぶべき「恐怖」なのである。

「太母」とは集合的な文化経験から抽出されるイメージをさす。それは肯定と否定との両極にわたるものでもある。嬰兒はみずからの経験を良い母親としての特質、すなわち、心くばり、優しさ、理性を越えた知恵や霊的な高揚感、助けをもたらす本能や衝動、慈悲、成長と豊穡とをもたらすすべてのものなどに結びつける。だが、他方で、同じ乳飲み子が悪い母親という秘密、暗黒、奈落、死者の国、誘惑、身の毛もよだつ運命などと母親を結びつけることもある。つまり、成長の過程でこの乳児は二つのイメージを同じ母親に結びつけながら、なんらかのかたちで折り合いをつけるということによって初めて自己を定めると考えられるのである。

そのさい、男性にとって女性は元来が異質のものであるから、母親の魅惑と恐るべき性格が無意識という「深い領域」にまで隠されてしまい、根源的なイメージというかたちでその影響が湧出し続けることになる。女性を植民地として扱い支配をもって対処しようとする男性の側に見られる心理的な

理由がこのはかり知れない「恐怖」として捉えられるのである。<sup>\*1</sup>

さらに「太母」には農耕に関わり地下に住む生命の化身というイメージと天上に住む神聖な処女というごく対極にあるイメージが重なり、それらがひとつになって両極的な母子関係を規定している。例えば、実際、聖母マリアはユングにとって特別な意味を持っていた。1950年、教皇ピウス12世によって聖母マリアがこの世の生を終えて、魂と肉体をともない昇天したということが正式に認められたとき、キリスト教における原型的な母親像が神聖な領域にまで高められたことをユングは歓迎したのであった。なぜならば男性原理としての「三位一体（父と子と聖霊）」に女性原理が付け加えられることによって従来の世界観に見られてきた身体と精神との「乖離」が緩和されることができるようになると受け取られたからであろう。

ところでユングは魂のイメージとして女性像をアニマ（エロス）と呼び、男性像をアニムス（ロゴス）としている。男性には女性としてのアニマが気分や反発、衝動をもたらすものとして潜んでいるし、女性には男性というアニムスがまさに意味の原型として潜んでいるとされる。この自分とは異なる性の原型的なイメージがしばしば魂の生を導くと言われる。ユングは魂の深部において人間を虜にしたり、導いたりするきっかけが異性であることを明らかにしている。その結果、男性において、もしかりにアニマがあまりにも優位になるとき、歯止めのない感傷性、気まぐれによって混乱にまで陥るとされ、逆に女性がアニムスによって支配されるとき、横暴なまでに管理好きの頑固者に豹変するとされる。

聖母マリアは特に男性原理の優位に位置づけられている人間の魂にとって神聖な女性の仲介となっている。女性は生命を司り、自然と特別の関係にあると言えるだろう。そこで女性は人間にとって優位を占めるかもしれない。だがそれだけでなく、女性はそもそも男性にとってまったく異質の存在なのである。女性によって代表される神聖性とは生命を育む自然として理解されるが、神は自然に内在するときも、あるいは自然を越えるときも人間を導く徴をずっとイメージのかたちで指し示してきたのである。

### 3. 女性という神話

性による役割の分担は男性による「女性の植民地化」をこれまで是認してきた。その有力な論拠は男性と女性が生物学的に異質であるという見解にもとづいている。この科学主義には女性を犠牲にしてまで男性を優遇しようとしてきた「家父長制」が反映している。

17世紀、理性の勝利をもたらした科学革命の背後では「魔女狩り」がしきりにおこなわれていた。「魔女狩り」とはかならずしも中世の産物ではなく、ルネッサンス期に端をはっており、科学的合理主義の原理を確定したデカルト（1596/1650）の時代において女性にたいする非合理的な恐怖として最高潮にまで達したのである。男性科学者による徹底的な自然の探求と征服は、男性による女性の懐柔

や征服と軌を一にするものではなかろうか。フランス革命をへた後も男性の側にくみする理性が真正の科学として解されており、次のようなジェンダーという二項対立があまねく承認されることになった。

(男性・女性) : (能動・受動) (筋肉・神経) (理性・感情) (自己・他者) (科学的知識・迷信と習慣) (経験により学ぶ・親族から学ぶ) (指揮, 監督, 管理・日々の世話) (消化器の病・愛の病) (賢者の知・無邪気な本能)。

このようにして男女の違いは相互補完的に捉えられ、なおかつ女性は男性につぐ亜流として貶められることになる。つまり、この対立によって感情よりも理性を重んじたり、肉体より知性を重視するなど人より物を選択することが決定されてしまい、それによってひとへの関心を優先するという女性のさまざまな特質、愛情、感受性、優しさ、思いやり、他者の尊重、心のふれあい、神秘的なまじわりなどが非合理的なものとして抑圧されるのである<sup>\*2</sup>。

ルソー (1712/78) でさえ女性の自然や健康は子供の養育であると明言している。18世紀末にリンネ (1707/78) が初めて人類に哺乳類という下位区分を導入したとき、「女性の本分」は自分の乳で子供を養育することとみなしている。ここで科学的なしかたで基礎づけられた「母性」こそまさしく近代の発明 (差別・階級・競争原理) として理解されるだろう。

自然は文化に劣る、女性は自然とみなされ、かつ男性は文化とみなされるゆえに女性は男性より劣る、という発明が認められるのは近代以降のことである。客観性を裏づけるべく数値やデータを重視している科学においても「知識のベールを剥ぐ」という比喩がしばしば用いられるのは「女である自然」を白状させるべく拷問したり、収奪しようとする「隠された意図」が籠められているのかもしれない<sup>\*3</sup>。しかも生物学的にも男性は常に自らの種だけを繁栄させようとする目的のために女性に多大の投資をしてきたのである。だが、自己の種の繁栄をめざす投資といえども物質的時間的には無制限な投資は避けられねばならないのもあった。そして他のオスの種を宿さない従順なメスが望まれるべき「性行動」は美しさという神話を疑わない少女たちの幸福な家庭を支配したイデオロギーなのである。

女性は人間である以前に「女らしさ」というイメージをおしつけられてきた。例えば、シンデレラや童話上のお姫様は、ひとのいいつけを「素直に」聞いて、王子様が幸せをもたらすのをひたすら待ち焦がれるのだが、どの女主人公のストーリーも唐突な結婚によってハッピーエンドをむかえることに変わりはない。「思いやり」や「素直さ」といういわゆる「女らしさの徳目」はストーリーを読みふけるにつれてやがて揺ぎない理想にまでなっている。若くて美しいから幸福をえられるのだと素朴に受け入れる少女たちは、たやすく自分はひとから美しいと思われてみたい、と熱望することになる。この美しさには個性が認められてはいない。少女たちの心に焼きつくのは幸せに結婚をするお嫁さんとして家庭に入るのだ、という一種の「脅迫観念」だけである。彼女たちに別の選択肢はこれからも与

えられそうにもない。それは女性が自分の人生を自らで切り開くという自立への道が阻まれているからである。つまり、女性という階級には「女らしい品性」や話し方が属しているのであり、男性という階級には支配する側の体面を保つという要求が見出される<sup>\*4</sup>。

近代科学という自然主義はずっと理性があやまたないことを疑わなかったが、この旧来の男性中心のイデオロギーを根底から覆すことができるのは、貶められてきた女性からの観点の捉えなおしであろう。後述するが、それは例えば、近年ますます注目されてきている女性の特質であるケアの態度における他者に依存する、という人間本来の成長や希望という「示唆」に見られるものである。すなわち、真の意味で「人間の現実」は理性によってだけでは決して十分には捉えきれないのである。

#### 4. 生命の尊厳

美という神話によって導かれてきた女性は、しばしば文化的に差別され、結局は自己実現をはばまれてきたのだが、この良妻賢母の生にだけ生きる喜びを見出すべきだという社会通念そのものが女性の視点からは拒否されるときがきている。

理想の女性像における美しさは、これまでずっと女性たちに沈黙を強制してきたからである。それはまたポルノに代表されるような通念としてゆるされる貧しい自覚が、女性への暴力を煽ったり肯定してきたことにも結びついている。女性がパーツごとに品定めの対象となったり、侮蔑的に商品化されてしまうことは、明らかに人間性を奪われることなのである。すなわち、女性の身体の部分が強調されることは、女性の価値というものが縮小され物として扱われることになる。それに売り物でしかない女性への値踏みとは、女性が本来、売春婦であり、汚い存在にちがいないと偏狭でしかたのない男性意識に刷り込むことであろう。

では、女性たちは強制や誘導によらずにどのようにして権利を取り戻すことができるのだろうか。それには自然と女性との深い結びつきをあらためて捉えなおす必要があるだろう。それは、一言でいえば、女性自身の身体にたいする自己決定の権利を尊重することである。しかも健康な子供を生む権利と責任とが不当に女性だけに負わされることがあってはならない。「生殖機能は女性が持つ、妊娠不妊は女性の問題、子供の品質管理は女性の問題」という見方は、女性一般を生命維持機能を備える胎児の容器としかみないことになるからである。

例えば、女性の健康と身体を重視するとき、産む自由も産まない自由も生ける自然の統一(地球)を育む生命系への顧慮なしには要請不可能になるであろう<sup>\*5</sup>。それは内なる自然としての女性の身体はまた地球全体における生命と常に密接に関連をもち続けてきたからなのでもあろう。女性の側にたつ自然の見方においてわれわれは先端医療技術のもたらす人類の生殖形態の危機を回避する方途を探らなければならないのである<sup>\*6</sup>。

現在、遺伝子のレベルで盛んに治療が試みられてきているが、そのさいあくまでも「生命の尊厳」

を生物学的な因子によってだけ捉えられるデータに還元しつくそうとすることは回避されるべきだろう。実際に選択的に中絶が蔓延してくると、出生前診断や遺伝子スクリーニングを通じて障害を生まれながらにしてもつ子供の数は激減するはずである。そのとき、この自己決定によって優生思想が受容されるのである。

つまり、人類をおこがましくも改善してやろうという考えかたは、今日、公私にわたり根強く残滓している。優良とされるプライベートな嗜好にしか過ぎない選択が、ゲノム解析による遺伝病の早期診断などとあいまって、生得的な人間の資質を人為的に改造してしまうとき、自然の生命の秩序を毀損しかねないのではないだろうか。人間の優劣を素朴に誰もが信じるがままに品種改良してしまつたら、生命のかけがえのなさは何によって保障されるというのだろうか。

「生命の尊厳」は生命体の代替不可能性を示唆しているが、それはまた生命のかけがえのなさを大切に守ろうしてきた人々の自覚によって伝えられてきた。障害児を不幸な子として貶めることは、不憫だから見ていられないという見かけの「善意」から安楽死をなんなく認めるパターンリズム（父権主義）と軌を一にしうる。このような障害児をひたすら排除してゆこうとする優生思想こそが近代の人間中心主義が拘泥してきた歪んだ進歩への依存の正体なのである。

優生思想は劣等な遺伝子（例えば、攻撃的遺伝子は反社会的遺伝子とされてきた）が人類から除去される時、人類は疑いなく幸福になるのだというあまりにも素朴で無責任な楽観主義にもとづいている。また、「善意」による安楽死の基準をあまりにも明確に定めると、それから容易に死の自己決定が死の義務として強制されてしまうかも知れないのである。そのとき、女性の視点は病めるひとのことを誰も取り残すことなく、共に生きることを諦めはしないのである。

## 5. ケアについて

ケアCareはまず他のひとへと配慮することである。例えば、父親がその子供の成長を見守り、ケアすると言われる。父親は子供が本来持っている権利を尊重しながら、その子供の自己実現を図るのである。このときも、父は子を専一的な仕方でコントロールしたり、支配を唯一の目標にするのではない。つまり、ケアというモラルを哲学的に洗練させたメイヤロフ（1925～）の『ケアの本質』（1971）によるとケアとは子の成長を助けるという過程を通じて働く総合的な気配りのモラルによって明らかとなるものである\*7。

ひとは他者をケアすることを介して、他のひとの役に立つことによってそのひと自身の生の真実の意味を生きることが身を持って理解することができるようになるのである。さらに、ケアそのものは正直な態度であり、他のひとの成長を望みかつ信じることによって成立するものであり、未知への飛躍（成長）が必ず到来することを辛抱強くまたなければならない。言い換えると、人間であることは他者への「思いやり」を持つことによって充実される。われわれが注目しうるのは科学によって掌握

されてきた「母性」の身体性の一方的な生物学的特性ではなく、むしろ精神性としての自然との親和力なのである。それは他者である胎児にまですすんで自分を提供する「思いやりの世界」を開示する驚嘆すべき自然の懐なのでもある。

また、ケアは感受性と責任感によって価値へと向かい応答する態度であるが、それは必ずしも自己束縛的な超越ではない。人間存在は個人的な怨恨と復讐において突き動かされるものであるが、その同じ人間性が他者を愛をもってケアするという崇高さによって自らの究極の価値を露呈することになる。ここで挙げられるケアは他者の苦痛を痛ましく思い、共感することによって自他共に希望へと歩みを進ませる癒しへと参加する生き方なのである。自己献身は「母性」を満たすものと隣人を愛し、その苦しみへの気遣いを持つケアとに分かれる。ケアは全く無力な者への無関心ではなく、自己献身的な振る舞いとして捉えられるが、それはまた、他者に依存するという人間本来の自己超越性への応答として受け取られる。

この価値に向って求心的な応答を呼び覚ます感情は、人間が生まれたときから他者によって守られてきたことに由来するであろう。哀れみは義務ではなく、これまで男性が決して主題としてこなかった「感情の原理（媒体）」である。この原理には苦痛のもとにある患者に生きる力を与えようとする「看護技術」に見られる高度に知的な情緒とでも言うべき配慮が見て取られる。

他者愛と自己愛は二者択一の関係にあるのではない。愛は影響を受けるというより、新たなものを生み出す力としてまさしく「思いやり」として能力を発揮する。感情は信頼を再び構築する情緒的な媒体であるが、それは回復をたすける癒しの関係に取り組む「看護技術」の発達を促すことになる。

例えば、看護師がケアによって適切な倫理的な規範に従っているか問われるさい、そこにはローチ（1922～）によると5つのCがその主要なモラルの契機を提供するとされる\*。

それは、思いやりCompassion、能力Competence、信頼Confidence、良心Conscience、専心Commitmentである。

思いやりとは全てのひとを他者の痛みの感じへと立場を変更させる感情である。苦しんでいるひとたちと「一緒に」声をだして泣いたり、孤独に悲しんでいるひとたちと「一緒に」悲しむように思いやりの自然が人間本性を促すのである。思いやりという繊細な情緒は弱く無力な人間存在のか弱い条件にも完全に没頭することになるからである。これはまた慈悲深い神とわれわれがいつも共に生きるということなのかも知れない。それゆえ、愛するものの成長という幸福を実現しようとするケアには人間らしさが現れるとされるが、それによって非個人的で冷徹なテクノロジーにもある種の精神性が吹き込まれることにも通じるのである。

能力は出世階段を登ろうとする動機や技術ではなく、困っている他者に手を差し伸べることによる自己実現の能力なのである。それは同時に適切で的確なケアという職業的な技量を指し示している。しかし、ケアといえどもそれはケアされるひとを対象として暴力的に操作したりはしない。人間性は本

来、相互の強い結びつきによって成立つ人格という能力の場所としてそこなわれてはならないからである。あるがままの相互に保たれる関係は、人格の自立性を妨げてはならない。他者のためになすということは、他者に自由をもたらすことである。

信頼とは真実に頼りあえる関係を構築することでなければならない。これはケアというサービスの實質に相当している。嘘やごまかしは信頼を成り立たせない。ケアの職業に従事するならば、嘘を合理化してはいけなし、しばしば見られる公的な領域の欺瞞を取り除かねばならない。

良心は物事にたいする倫理的な自覚、モラルへの執着である。この感情はつねに自己の意識の出所が倫理的な規範にもとづいたものなのか裁定している。だが良心という感情はあやまつこともある。にもかかわらず良心は倫理的な行動規範へと己の照準を再び正そうとするモラルでありつづけることもできる。かくして良心こそがケアの呼び声として自らを表していると言えるだろう。

思いやりに満ち、能力を伴う行為において、信頼によって成立つ関係の中で、見識を持つ感受性を備えた良心を通じ、最後に忠実なまでの専心によってケアは完成されることになる。専心はもろもろの行為を義務とは感じさせることなく、ひたすら自発的な仕方であらうと自らを促す。思いやりや信頼の感情を一つの価値へと受け入れるためにこのモラルは自己の職業的意識を収斂させるのである<sup>\*)</sup>。

このようにして、ケアは信頼や謙遜によってひとびとを結びつけ、弱き人間を互いに支えあいながら成長することができる。ケアは相手の成長を辛抱強く信頼しながら待つときもある。互いを強めるケアは、子供を躱けたり、絵を描くことを教えたり、心理療法を施したり、内心のアイデアをじっくりと育てるといふ働きでもある。

## むすび

ケアをはじめとして、他者のために生きるということは、自らを実現することである。良心に従って良く生きようとする人間本来のあり方が、すでに多くの生命との結びつきによって理解されるのであろう。自然をケアとの関連によって捉えるためには自己と他者との責任が生命によって包括されるという根源的な事実を露呈しなければならない。

自然を愛するためには人間が「自らの存在の中で力を尽くす」というモラルが要請される。例えば、ヒューマニズムは狭い意味では自然を利己的に支配する人間の自己愛の象徴になるが、それが真実のものとなるためには生命との共感が必要になるし、それは生命原理に親しい「女性の声」に耳を傾けなければならないのである。すなわち、科学的理性が招致してきた生命なき自然観は今や、「女性の視点」からただされるときがきている。自然においてこの生命は、神秘的な創造性や活動性によって本来的な仕方であらうと受け入れられるのである。

## 注

1. 女性が社会における権利に目覚めたのは、1848年、アメリカ合衆国のグリムケ姉妹（1792/1873）、（1805/79）ら献身的な奴隷解放論者の働きをはじめとしている。この動きはイギリスのテイラーに届くが、彼女は後にミル（1806/73）と結婚することになるが、ミルは議会に嘆願書を提出したり、『女性の解放』（1869）を著すことになる。婦人参政権は初期の婦人解放運動の焦点であったが、それはまたブルジョワ的な欠陥を持ち、選挙権の獲得によって衰退してしまった。ミルは元来、個人主義の功利主義を認めながら、利己的な個人といえども「仁愛」と呼ばれる利他的な衝動を通じて社会主義的な倫理観（同情論）を展開していった。次に、女性が家庭生活の無為と依存から解放されることが叫ばれたしたのは、アメリカ合衆国で起こった1960年代の公民権運動からである。その最大の敵は父権制の精神構造であり、騎士道精神における女性崇拜（劣ったものへの温情）でもあった。しかし、現実には女性は男性と同じ質の労働からは締め出され、卑しい労働ばかりあてがわれたりしており、それは女性がこれまで特別の場合以外は頭脳を使用することが是認されてこなかったという理由による。ミレット（1934～）はこのような二重の基準を内包した父権主義を自らの苦しい体験から説き起こし『性の政治学』（1970）において初めて明確に示した。

Millett, Kate. *Sexual Politics*. New York, 1970.

「性の政治学」藤枝零子訳、ドメス出版、1985年参照。

2. 妻が夫に従属することは国家によって管理されてきた「抑圧」なのである。上辺だけの「女らしさ」だけを肯定する社会通念は、人間を男性と同一視してきた学問観を育ててきた。学問と科学は男性が主体となり、匿名の客観性によって成立したが、同時に女性は男性の一部として隷属を余儀なくされた。男性が家族を養い、女性が養われるということは良く言えば美しい家族愛であるが、シャドウワーク（無賃の家事）を任される女性の視点から見ると彼女たちは自己実現が阻まれるという「不幸」のもとに生きなければならないのである。

Illich, Ivan, *Gender*, London, 1984.

「ジェンダー」玉野井芳郎訳、岩波書店、1984年、188-190頁。

3. 環境科学において生命を生きることなき物質にまで還元するとき、従来の客観重視のイデオロギーが抗争と支配をふりかざす男性中心の科学主義として明らかになってくる。ジェンダーによって統制されてきた科学主義を解体して、女性の視点から男性至上主義の科学観を批判することは、感情をもとにして自然への参加的な交わりや関係という生命そのものの創造性を回復することに結びつくだろう。女性は競争よりも協力を重視して、生あるものとしての自然をより身近に感じることができるからである。

Von Werlhof, Claudia, *Männliche Natur und Künstliches Geschlecht*, Wien, 1991.

「自然の男性化／性の人工化」加藤曜子訳、藤原書店、2003年、254-256頁。

4. 自然の破壊を阻止するには、経済成長と環境保全とを両立させるために技術革新を進めればよいのだとは楽観できない。寧ろ、われわれはより根源的な自然と人間との結びつきに関して、今まで不問にされてきた自明の事柄、すなわちあたかも客観性を装っているかのような近代的な意識によって構築されてきた制度を反省しなければならない。これまでに権威主義、軍国主義は女性の抑圧と結託しており、それが政治的な実体を形成した。

Drengson, Alan and Inoue, Yuichi, *Deep Ecology Movement*, California, 1995.

「ディープ・エコロジー」井上有一共編、昭和堂、2001年、147-152頁。

5. 1994年にカイロで開かれた国際人口会議で、初めて性と生殖にかんする健康と権利が宣言された。それは性と産む、産まないに関わることを「健康の権利」として位置づけるものである。性行為をもつかもたないか、避妊をするのかしないのか、妊娠した場合に出産するのか中絶するのかなど健康に関することを法律や人口政策、宗教や家族によって予め決められるのではなく、当事者である女性が人生の選択のひとつとして決める、つまり「自分の体の主人公は自分自身」という内実が、社会的・経済的・政治的に保証されるべきであるという主張がそこに籠められている。また同時に、その意図は女性の身体が男性の快楽に奉仕したり、人口抑制や医学実験、女嫌いの科学によって乗っ取られることへの抗議でもある。加えて、性と生殖の自由には育児施設や医療問題、私生児にたいする世間の扱いも含まれることになる。

上野千鶴子・綿貫礼子編著「リプロダクティブ・ヘルスと環境」工作舎、1996年、23-36頁。

6. スウェーデンやフランスでは強力な家族政策を勤めて巨額の国家予算を支出している。「働く母親」の育児との両立を目標にした公共的な育児支援策は出生率の水準を維持するのに一定の効果があると評価されている。女性の高学歴と労働参加は歴史的趨勢ではあるが、「働く母親」に親和的な育児環境を整備することで出生率の低下はある程度、食い止められると考えられている。子供を育てるというコストについては、教育費や住宅費のように目に見えるコストの他に、女性による「再生産労働」というシャドウプライスを忘れることはできない。核家族の中での孤立育児に専従しなければならない子育ては、女性にとってコストのかかるものとなっているからである。妊娠の維持に関しても、それは労働とはみなされてこなかったし、労働というよりも自然現象として捉えられ、女性の人格も生まれてくる子供の人格も消去され続けた。

江原由美子「フェミニズムのパラドックス」勁草書房, 2000年, 159-174頁。

7. 男性によって代表される理性は人類全体と自然とが共有する生命との繋がりを不当に無視してきた。感情は理性が男性であるようにして女性の側にあるものとして貶められてきた。つまり女性の感性による自然への驚きも畏敬の念も科学的な合理主義においては問題にされてこなかったのである。

Mayeroff, Milton, *On Caring*, New York, 1971.

「ケアの本質」田村真訳, ゆみる出版, 2005年, 13-16頁。

8. ジェンダーのヒューマニズムは女性にだけ自己犠牲を強制してきた男性には気づかれてこなかったものであり、弱者への思いやりという感情が人権を支えるという事実が明らかにされてくる。女性の思いやりは善悪の二者択一のジレンマにおいてもまずひとを傷つけまいとするのである。例えば、看護技術ではひとつの基準や法則によって支配されるのではなく、文脈依存的に自由裁量によってケアが実施される。ケアの危険は相対的な判断によって引き起こされるのだが、それは同時に現実に葛藤する複数の当事者の間では「誰のことも傷つけまいとする判断」をうまくつむぎだすことができる。

Roach, M. Simone, *Human Act of Caring*, Ottawa, 1992.

「アクト・オブ・ケアリング」鈴木智之訳, ゆみる出版, 1996年, 98-111頁。

Benner, Patricia, *From Novice to Expert*, California, 1984.

「看護論」井部俊子・井村真澄・上泉和子訳, 医学書院, 1992年参照。

9. ジェンダーの制度、文化上の役割差別や偏見を解体することが自然科学による自然の隠蔽から生命の価値を再発見することになる。いわば女性が自然を救済するのである。あるがままに自然を受け入れようとする女性の視点は、世界を征服してきた男性科学者とは全く異なってきた。男性中心の自由主義や個人主義は、女性の経験や主張を利己主義というレッテルを張りかき消してきた。男性は女性であることの独自性をみとめず、感情や思いやりの道徳を非合理主義として非難するのである。このとき、自己犠牲の道徳にとって前提をなしてきた「もう一つの声」という自然の驚嘆すべき真実が明らかとなる。科学が互恵性や協調の価値を自然の声に読み取るためには女性による視点の変更が必要なのである。

Gilligan, Carol, *In a Different Voice*, Cambridge, 1982.

「もうひとつの声」岩男寿美子訳, 川島書店, 1986年, 176-186頁。

Friedan, Betty, *Feminine Mystique*, New York, 1977.

「新しい女性の創造」三浦富美子訳, 大和書房, 1965年参照。

#### 参考文献

Shiva, Vandana, *Staying Alive*, India, 1988.

「生きる歓び」熊崎実訳, 築地書館, 1994年。

Jordanova, Ludmilla, *Sexual Visions*, London, 1989.

「セクシュアル・ヴィジョン」宇沢美子訳, 白水社, 2001年。

Schiebinger, Londa, *Has Feminism Changed Science*, Cambridge, 1999.

「ジェンダーは科学を変える」小川真理子訳, 工作舎, 2002年。